



昔の話

2月12日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

2月12日のおはなし「昔の話」

目を覚ますと絶好の快晴で、カーテンの隙間から明るい青空が見えている。ぼくは元気よくベッドを飛び出す、勢いがつき過ぎてずっこけた。「いてっ」と腰に手を当てつつ、窓辺にもたれ、カーテンと一緒に大きく窓を開け放つ。爽やかな五月の風が流れ込み部屋の空気を一新する。

「よし行ける。」

思わず声に出してそう呟いてから、我ながら吹き出してしまふ。何が行けるというのだろうか。どうなれば行けたことになるんだろう。あんまり想像をふくらませると品がなくなりそうなので、あえて考え過ぎないようにして、ぼくは身支度を始めることにした。今日は何を着ていくか。これについては前夜のうちに念入りな計画を立てていた。

最初のデートのときはアイビーで決めた。明るいブルーのボタンダウン・シャツに三つボタンのブレザー。もちろんヴァンチャケットだ。クリーム系のチノパンにコイン・ローファー。ぼくとしてはほれほれするくらい決まっているつもりだったんだけど、彼女はTシャツにジーンズ。しかも履き古したスニーカーという出で立ちだった。二人で並んで歩いていても、お茶をしに店に入るときも、微妙にバランスの悪さを感じてしまった。彼女も同じことを思ったのか、何度か困ったような微笑みを浮かべた。

でもそれで終わりじゃなかった。また会えることになったのだ。だから二回目のデートではぼくも思い切って普段着な感じをねらってみた。とはいえ、Tシャツはザ・ローリング・ストーンズの例のベロを出した斬新なデザイン。日本ではまだそんなに持っているやつはいないはずだ。ジーンズはパンタロンで、由緒正しくブーツを履いていった。ところが今度は彼女がフリフリのついたワンピースに真珠のネックレス、ハンドバッグにハイヒールというどこのお嬢様だという姿で現れたのだ。二人とも顔を合わすなり吹き出してしまったのが救いだったけど、あの日も居心地が悪くて閉口した。

別れ際にぼくが「何を着てくるか決めようか」というと、彼女はニコニコしながら「ダメダメ、決めないから面白いんじゃない！」とひどく面白そうに目をキラキラさせて言ったんだ。ぼくはもうそれを聞いて、卒倒しそうになったね。なんて最高の女の子なんだ！って。

だから今日、ぼくは賭けに出ることにした。これを見て彼女がどんな反応をするかが楽しみだ。アイビーでもなく、ロッカーでもなく。ところが服が見つからない。それどころかここがどこなのかわからない。最初は明るい外を見ていたせいで目がやられているのかと思った。違った。そこはぼくの知らない部屋だった。ぼくは部屋の中を歩き回り、いったいどうなっているのか調べようとした。だいたいこのままでは彼女との待ち合わせに間に合わなくなってしまう。そうだとにかく早くここから出なくては。パジャマのままでは出かけるわけにいかない。いくら彼女の反応が面白くてもパジャマで新宿に行くわけにはいかない。いや。新宿ならありかもしれない。なにしろ新宿はいま東京でいちばん面白いことになっているから。

ぼくは部屋のドアをそっと開けた。誰かぼくを閉じ込めた人間がいたら困るからだ。でも誰もいなかった。別に監視されているわけではないらしい。短い廊下の先に階段があって、そこも外の光があふれんばかりだった。手すりにつかまりながらそっと降りると（家の中の階段に手すりがあるなんて！）壁際にかかった小さな絵が目にとまった。それはどれもぼんやりとした思い出せない夢のような幻想画で、明るい陽光のもとで見るとちょっと落ち着かない感じがした。ちょうど二回目のデートのぼくたちのように。

階段を下りるとすぐ玄関があったので、ぼくは自分に合う靴はないか探そうとした。その瞬間、一階の廊下の突き当たりのドアが開き、一人の女が姿を現した。

「あら、起きたの？ ごめんね、気がつかなくて。コーヒー、飲む？」

親しげに話しかける女は、ぼくの母親ほどの年齢で、もちろん知らない女だった。この女がぼ

くを閉じ込めているのだろうか。ぼくは何と答えていいかわからず、ばかみたいに「コーヒー？」と繰り返した。

女の表情が変わった。慎重に観察するようにぼくを見ると、女は言った。

「いま、何年？ 西暦何年？」

ぼくはぞっとした。この女、頭がおかしいんだ。

「1971年に決まっているじゃないか」

女は何か考え込むような顔つきになって、それから不意に顔を上げた。そして叫ぶように言った。

「いつ？ 1971年の何月？」

「5月。5月19日だよ」

その瞬間、女が驚くべきことを言った。

「三回目のデートの日だ」

「あなた、誰ですか？」

そう尋ねると、女は傍らにあった新聞を手にしてゆっくりぼくに近づいて来た。

「大丈夫よ。わたしは慣れてるから」

「慣れてるって何に？」

「あなたは少しずつ記憶を失っているの」

「記憶を失う？」

「記憶を失って、だんだん昔にさかのぼっている」

「昔にさかのぼる？」

どういう意味だ？ 昔にさかのぼるって？ ぼくはまだ……。

「最近の記憶からなくなって、いまは若い頃の記憶しかなくなっているの」

「若い頃の記憶？」

「いまあなたは19歳だと思っているけれど」

「何を馬鹿なことを！」

そう答えてから気がついた。この人は彼女に似ている。彼女のお母さんなのだろうか。いや。まさか。

「これを見て」

渡された新聞を手にとると、馬鹿に大きな活字が目に入った。

「見ろって、何を？」

「日付」

そこには2012年2月12日とあった。冗談だろ。こんな活字のでかい作り物の新聞でぼくをだませるとしているのか？

「ああ。また作り物の新聞だと思っているのね」

女は困ったような微笑みを浮かべた。ぼくはどうしていいかわからなかった。だってそれは最初のデートのときの彼女の微笑みにそっくりだったから。そして女は言った。ぼくしか知らないことを。

「あなたは和服を着て来たわ。旧制高校生の格好なんだって言って」

その通り。ぼくは旧制高校生風の服を着ていくつもりだったんだ。

言葉に詰まってしまったぼくに、女は、いや、彼女、40歳近く年をとった彼女が優しく話しかけ、食堂に案内してくれた。外の光がやわらかに差し込む部屋で彼女はコーヒーを用意してくれた。白い木綿のシャツに薄茶のロングスカートをはいた女性は、もうすぐ60歳のはずだが、動きはてきぱきとして若々しかった。

カップに注いだコーヒーにホイップクリームを加え、シナモンパウダーを振るとぼくの前に置いて彼女は言った。

「シナモンスティックがなくてごめんね。これ、あの日、新宿のDUGで一緒に飲んだのよ」

「カプチーノだ」

「そうね」彼女は少し笑って言った。「あの頃はシナモンコーヒーのこと、カプチーノって言ってたわね」

「あの頃は？」

「そう。昔の話」

口に運んだカプチーノはビターな恋愛物の味がした。

(「「三回目のデート」「待ち合わせ」「カプチーノ」を使って、ビターな恋愛物」 ordered by PoorTom-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

昔の話

<http://p.booklog.jp/book/43825>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43825>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43825>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.